

虹の食草は夢である

香川弘昭(6回生)(2016.12.5 受理)

和氣先生を偲ぶ会に誘われ、善通寺市木徳のお墓にお参りして、金比羅山の屏風岩まで当時を振り返りながら辿った。飛来するイシガキチョウをしばらく見守りながら、時を過ごし、次回の再会を決めた。東京支部会の原田さん、横山さん、臼杵さんの大手前時代の活躍ぶりを知っているのだから、当時の釣果を競うことは出来ない。生家の東部山近くでクヌギの木株でクマンバチなどと蜜を吸っているオオムラサキのメスを採り、指で押さえた感覚は今も覚えている。硫酸紙に卵を多数生み、お城からエノキの葉をとって与えたが、孵化までいたらず、心残りである。

宇高連絡船を宇野で降り、東京行きの「瀬戸が」出て、大阪行きの準急「鷺羽」が出た後、端のホームから岡山行きの鈍行に乗るまでにはしばらくの時間を過ごした。岡山大学の山岳部を卒業して、名古屋の分子生物学研究施設で大学院を過ごした。分子生物学学会の時に日本の虫仲間が「蟲の会」と称して、大澤省三先生を中心に集まるようになった。福岡の時には図鑑でのみ名前を知る白水隆先生の講演を聴いて、記念写真を撮ったこともある。蟲の会は昆虫 DNA 研究会 <http://insectdna.web.fc2.com/> に発展して、会報が出版されている。蝶の食草が1:1で決まっているのは、匂いの受容体の遺伝子に依る。山の上と下で住み分けている理由なども順次明らかになっている。研究対象が形態から遺伝子とか DNA に移ったが、奇種、珍集の収集に憧れ、ロマンを求める昆虫少年の夢も大きく膨らんでいる。

岡山大学に帰り、1983-85年にイギリスで「線虫 *Caenorhabditis elegans* の分子生物学」を研究するようになり、帰国後は同じ分子生物学会に「虫の会」と称して線虫の研究者が集まるようになった。いずれのムシの会も第一回の集まりは10名足らずであった。定年近くなって、高校生に最新研究をやさしく話す機会に恵まれ、生徒に虫のつく字を黒板に書かせた所、女生徒が「虹」と書いた。虫扁の生き物はいわゆる虫から、蛙などの両棲類、ヤモリなどの爬虫類まで含まれることが分かった。考えついたのが、「虹が虫なら、食草は草扁の夢」を見つけた。この話は後日、日本生物物理学会の巻頭言に載せた。



定年後は山岳会の活動として、ネパールのヒマラヤ山麓の学校へ、パソコン、ソーラーパネルなどを贈っている。道中で見つけたイシガキチョウ(写真)。食草はイヌビワで暖地性のため、冬には葉が落ちる。実はイチジク同様、ジャムに出来る。生物部でも対象が蝶から植物に移り変わる経済発展の頃に遭遇した。梶ヶ森で採集したエビネ、クマガエソウなどは家の裏に植えて花を咲かせた記憶が有る。日本のランを10種以上集めて栽培することに憧れた。定年後、秋のネパールでセロジネを採り、荷物に潜ませて持ち帰った所、翌春、花を咲かせたのには感激した。着生ランを育てるには、温度、日当たり、水気、肥しなどに気を配らなければならない(写真は、ネパールにある8座の8千メートル峰をデザインしたTシャツと我が家で咲いたセロジネ)。

生物部の頃の蝶の採集で、アサギマダラなどの蝶道や、ナガサキアゲハの柑橘類、アオスジアゲハがクスノキなどの食草などに関心が移って行ったように、生物部で過ごしたことは、自然理解に大いに役立った。和氣先生が「跡を継ぐ者がいない」と嘆かれたそうだが、現在、山岳部が活動している大学は少ない。先日の金比羅山への散策で、長峰 勝氏も山岳部で活躍されたと聞いて、今後のカエルの会の集まりも楽しみが増える。



🐸